

## Edition Link Program 2022 – WS in Silpakorn University 報告書

期間 :2022年 8月20日(土) – 8月24日(水)の5日間  
※復路フライトは、25日(木)早朝に到着

引率者 : 佐竹邦子(版画専攻教授)

派遣者 : 博士前期課程大学院 版画専攻1年 2名  
・32213001 磯崎海友  
・32213005 佐藤翼

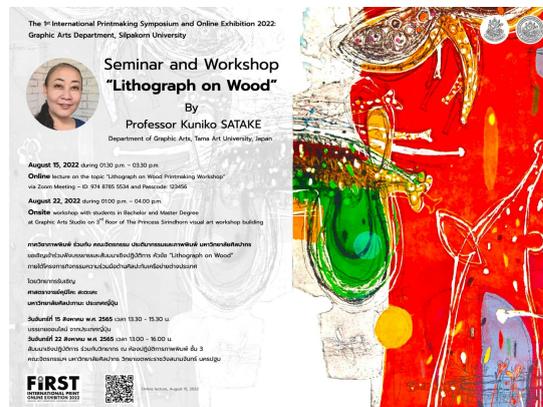
受入期間 : シラパコーン大学 ファイン&グラフィックアーツ学科  
WS開催場所 : ナコンパトム・サナンチャン宮殿キャンパス  
WS参加者 : 約40名

### ■プログラムの経緯と概要

今回のプロジェクトは、シラパコーン大学(以降SUとする)の主催するThe first print online exhibition 2022 国際展関連事業として、オンラインプログラムの依頼がきっかけとなり実施された。コロナ禍において昨今の海外渡航も不自由になっていたが、オンラインを使うことで多様に交流できる世の中への移行の最中、ここで学生の派遣プログラムへの結び付けることに大きな意味があると考え、またタイは、コロナ禍の海外渡航者入国受け入れをいち早く実施していたこともあり、オンライン・オンサイト双方による「木によるリトグラフWS」を実施することとなった。



版画専攻では、以前より、「Edition Link Program」という版画における、展覧会、ワークショップ、フィールドワークなどの学生間国際交流活動が、ゼミのような形で行われてきた。2013年度より、タイやオーストラリアなどへ派遣し活動してきたが、コロナ禍においてこの2年ほどは実施されておらず、今回の依頼により久々学生を派遣することが可能となったことから、「木によるリトグラフ」版画技法の制作経験のある本学大学院生2名が、報告者であるわたくしと同行し参加することとなった。



まず事前に行われたZoomによるオンライン講義では、シラパコーン大学の学生へ木によるリトグラフの概要と作品紹介、その制作工程の説明を行い、参加する派遣学生には、1週間後に我々が渡航しオンサイトによるワークショップまでに、レクチャー用の版への描画とアラビアゴム塗布までの製版を準備することを指導した。SUの学生にも同様に、現地の材料において板木に描画と簡易製版を進めてもらうこととなった。

渡航スケジュールは5日間(帰国のフライトが夜間のため日本到着は翌日の早朝着)のショートステイではあったが、今回の目的であるワークショップだけでなく、タイ初渡航の学生のために、その文化や歴史、アート事情を案内することも含め、バンコクとナコンパトム県の訪問スケジュール計画も綿密に準備する必要があるがあった。なんとといっても大きな課題としては、コロナ禍による帰国前72時間のPCR検査受診の義務であり、渡航準備として学生のワクチンパスポートの申請対応や海外旅行保険の確約、何より5日間中の移動も含めた感染防止を考慮したスケジュールリングや検査場の手配などを行う必要があるがあった。また実際にコロナ拡大による渡航中止、あるいは渡航先我々の誰かがコロナに罹患した場合の想定も含め通常の派遣とは異なることが多く、国際交流センターや受入れ先のSU教員と相談しながらプロジェクトが進められた。

## ■ ワークショップについて

今回の目的として、第一の課題は木によるリトグラフ制作のワークショップにおける学生間、およびタイ人参加者との交流が上げられる。

SUの美術学部は2つのキャンパスで指導が行われている。バンコク王宮に隣接するタプラ・キャンパスとナコンパトム県のサナンチャンドラ宮殿キャンパス(タプケオ)である。主に、博士課程や一部のデザイン系学科はタプラで、ファイン系含めた美術学部はタプケオで授業が行われている。今回のワークショップは、バンコクから60km移動したナコンパトム・タプケオキャンパスでの開催となり、渡航2日目にSU教員の車で移動し、大学視察と準備打合せを行った後、夜には関係者との懇親会に招待され、タイ到着後間もなく学生も現地の雰囲気や案内くださった教員の人柄に触れることができた。

3日目、午後のワークショップ開催前に、我々は帰国前72時間以内のPCR検査を受診する必要があったが、バンコクから離れたナコンパトムでのPCR検査をどうするかに大きな懸念があった。しかし、SU教員の計らいで、ワークショップ前に、ナコンパトムのバンコク病院での受診をアシストいただき、慌ただしい中ではあったが、なんとか渡航者全員が受診を済ませワークショップに臨むことができた。

シラパコーン大学では、2016年に私が3ヶ月間の研修で滞在した際に材料や道具、制作方法をレクチャーしていたこともあり、また事前打合せにより準備は完璧に行われていた。参加者は、シラパコーン大学各学年と卒業生、またOnline Exhibition受賞者含め約40名が参加。コロナ防止対策として、参加者全員が抗原検査陰性が確認されており、また説明などには密になりすぎないように2つのグループ2回に分けての導入を指示された。

午後13時より3時間ほどワークショップであったが、すでに描画と製版は完了しており、刷りをメインの指導として、2種類の印刷方法(足踏み刷りと銅版プレス機による印刷)を導入した。本学学生には、デモンストレーション用に各自版に描画および製版したものを準備するように伝えており、実際にその版を使って現地で説明を行った。

インク付けまでの一連をレクチャーした後、派遣学生には、自身の版で足踏みの方法で印刷を披露してもらい、その後各自の印刷が開始された。

本学の派遣学生は、私から彼らへ指示を出しつつも、自身で考え、必要とされることを考慮しながらWS指導に参加してほしい意図があり、タイムスケジュールにおける細かな説明は行わなかったが、指導中必要となることをよく観察しながら参加者へのコミュニケーションを自由にはかってくれたと感じている。最初は緊張していたようであったが、徐々に緊張もほぐれ、何をしたら良いのか状況を判断しながら行動し考えている様子もよく伝わってきた。ワークショップ終了後、学生兩名自ら「もっとこうすればよかった」などの意見があり成長の一つとして見受けられた。

また、タイ現地で使用する材料なども日本とは異なることから、学生もそこに着目していたようであった。特に描画材など、この技法において本学指導では普段使用しないダーマトグラフで描画するように伝えてあったことも、派遣学生は「これで大丈夫なのか？」と気になっていたようである。当然、描画材が弱いことで、インクで真っ黒になった版の復元をどのようにするのかなど、タイの学生へ行う私の指導も彼らにとって有効だったように思われる。

タイの学生、参加者からは、とにかく黙々と制作する姿勢や集中力をいつも感じる。各々がこうやりたいという意図も強く伝わってくるので、それを受け、本学の学生が共に考えることを経験してくれたことは非常に嬉しく感じる。このような機会の中で、普段日本で制作する環境とは異なり、他の国の同年代の学生たちと触れあうことで培われる、新たな発見やアイデンティティー、また感性が磨かれることを期待してやまない。











#### ■フィールドワーク、その他

ワークショップ実施の使命だけでなく、せつかくのタイ渡航である。タイ王国の文化や伝統、さまざまにおいて、その歴史的な魅力も知ってもらいたいと思っており、寺院、美術館、ギャラリー、バンコクとナコンパトムの大学施設も含め、学生を各所へ案内した。

初日～2日目、実は渡航前に学生からのワット・ポー訪問のリクエストもあり、その近くに初日の宿を取り、チャオプラヤー越しにワット・アルンの眺めを堪能しながらの散策や、翌日のナコンパトム移動の前に、トゥクトゥクを利用してワット・プラケオへ引率では、2大寺院を比較しながらの見学において、それぞれの歴史や見どころなども説明した。タイもそれぞれの王朝時代でブッタの様式も変化する。チェンマイとバンコクだけでも、彫像や建築様式も大きく異なるため、今回我々には時間がなく断念したが、タイ渡航の際には、バンコクだけでなくランナー地区にもぜひ訪問することをお勧めしたい。



2日目午後にはワークショップのため、ナコンパトムへ移動。

ナコンパトムは、ラマ5世の別宮であるサナンチャン宮殿他、タイで最古最大のバコダのあるプラ・パトム・チェディは有名で、寺院下では、夕方からナイトマーケットも開かれ、学生はSU教員の案内で訪問した。

ナコンパトムでの夜は、SUの若い教員方、プライベートで訪れていた本学の助手も含め、懇親会を開催いただき、学生は、進んでコミュニケーションを測っており、その中で、先生方とタイ語や文化、食事についてなど、いろいろ教えていただいていた。ワークショップ終了後も、SUのVichaya学部長、前任学部長のYanawit教授、その他関係教員やスタッフが揃い、我々をもてなしてくださり、今後の本学とSU間でのプログラムの提案や、各自の研究を共有するなど、学生も教員も有意義で充実した時間を過ごすことができた。

4日目午後にはバンコクへ移動。本学グラフィックデザインの元研究生で現在SUデコラティブアートの教員であるチラユ先生にもアシストいただいた。

サイアム地区のフィールドワークとして、BACC、ジムトンプソンアートセンターなどを案内し、この日の宿は若い学生のためにカオサンにブッキングしたので、夜はこのバックパッカーの聖地を散策した。ローカルな渡し船など、現地のインフラも利用し、学生にとっては初めての、多くの経験ができたのではないかと感じる。時間があれば、MOCAへ案内したかったのだが、スケジュールの都合上断念した。





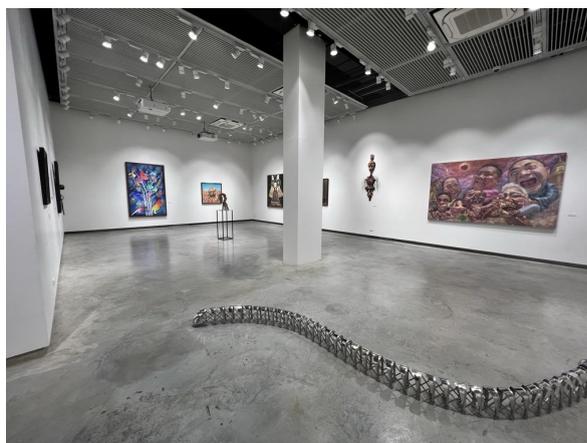
5日目最終日、遅いフライトを予約していたが、遠出はせず、SUタプラキャンパスゆくり訪問した。

今回、最後まで全てにご尽力いただいた博士課程アートセオリー教員のChaiyosh准教授に、校内各ギャラリー、新設されたSUの図書館、またアートセンターなどをご案内いただいた。私は何度も訪問したSUタプラキャンパスではあったが、2016年にはまだリノベーションの途中だったキャンパス内も、すっかり模様替えされ、現代的でおしゃれなキャンパスへと変貌していたことに驚かされた。

特に図書館は本当に素晴らしかった。本年度開設された、まだ新しい図書館は、カテゴリ化された空間のいくつかで構成され、まるでアトラクションのようであった。なんといっても、学生の利用頻度の高さと利用する学生の様々なスタイルに高揚する。それは建物よりも、その内部に仕組みがあると思えた。学生たちは、各々のスタイルで本を読み、友人と勉学を楽しみ、ディスカッションを行い、それぞれが自分の居場所と目的を自由に設定し活用している。そしてここは活気にあふれていた。

タプラキャンパスは、主に博士課程とデザイン学科の一部などがあり、美術学部のほとんどの学科はナコンパトムのタプケオキャンパスで授業を行なっていることから、この図書館ではセオリーの課題や論文課題で、仲間たちとセッションしながら図書館を利用することが必然として多くなるのかもしれない。

建物は、Maha Rat RdとNa Phra Lan Rdの辻に面しており、2階の大きな窓からその街並みが望める。図書館は専門的に区切られた空間となりがちであるが、窓からのタイの生活が望める眺めがうまく融合し、カフェのような気さくな雰囲気漂い大変心地よい。







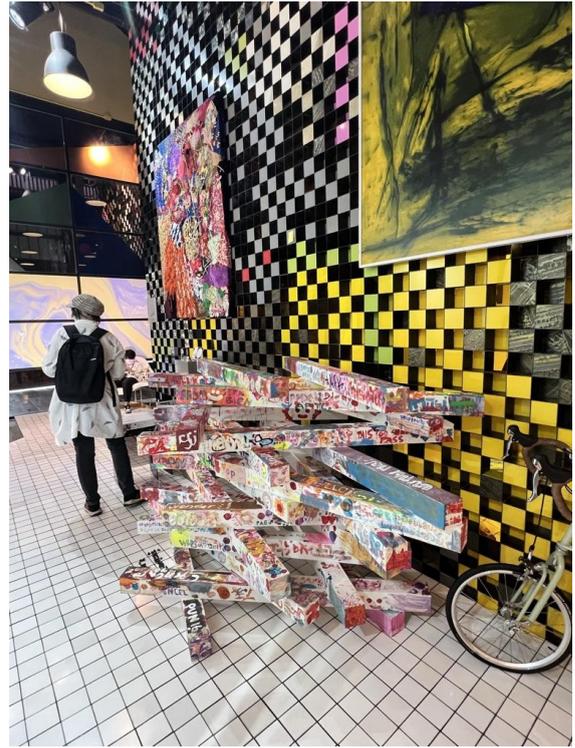




SUアートセンターでは、運良くタワッチャイ プンツサワツ氏の企画展が開催中であった。バンコクビエンナーレやシドニービエンナーレなど海外の展覧会にも多く出品している作家である。今回は、彫刻だけでなく、製図の様な平面作品、レリーフ作品含めて、様々な角度からアーティストの視点を覗ける様な構成となっていた。またシラパコーン大学アートセンターは、西洋とアジアが融合する建物の構造で時代を感じるアンティークな雰囲気をもっている。この空間にマッチしインストールされた作品たちは、実際の時を感じさせない。学生と共に、贅沢な空間をゆっくり味わうことがとても嬉しく感じられ、様々な想いと醍醐味の楽しめる展示であった。



空港までの道中、バンコク(バンラック地区)の333 gallery/where house 30、ATTA galleryなども訪問した。昨今、このようなコンテンポラリーのギャラリーも増えつつあるバンコクである。アメリカやヨーロッパに触発され、アジア特有の西洋への憧れへ突入する表現が蔓延するなか、タイのアーティストの興味深いところは、タイアートの古き尊い時代の表現や概念を考察し、これを現代美術になんの抵抗もなく取り入れ表現しようとする若者も多い。良い意味で、日本の学生も学ぶべきところがあると感じる。



以上が、本プログラムの報告である。

学生には初めて海外で上手くいかず混乱することもあったようだ。しかし、うまくいったこと、いかなかったこと含め、これら全ての経験が彼らの財産となりうることを感じていただきたいと思う。

短いプログラム期間ではあったが、タイの体験が学生にとって新たな知見となり、今後の制作に良い影響となることを切に願うと共に、この度全てにご尽力いただいた、SU関係者への感謝を心より申し上げたい。また、今後のタイと日本の友好関係を一層深め合い、そして学生へこのような素晴らしい経験を適用できるよう、様々な形でのプログラム継続を進めて参りたいと思う。

2022年9月30日

報告者：版画専攻教授 佐竹邦子